

二つの百済・二つの飛鳥

はじめに

前回までの話、①飛鳥には渡来人が移住し、大陸の新技术で未開地を開拓。②檜隈や飛鳥に宣化天皇をはじめ飛鳥時代の天皇宮が集まり、③東漢氏らを統べる蘇我氏が飛鳥寺を創建し、百済の仏教を導入。④欽明天皇はじめ飛鳥時代の天皇陵が集中、高松塚・マルコ山など装飾古墳も集中。⑤渡来氏族を統率した蘇我氏の墓、蘇我氏系の天皇陵は伝統的な前方後円墳をやめ方墳・八角墳・百済王墓に起源を持つ横口式石郭墳をいとなむ。飛鳥時代の古墳群は、天皇陵・豪族墓・渡来系氏族と在地氏族の群集墳という構成になる。

I. 「日本」「天皇」の初現と陵墓記載

1. 神武天皇『日本書紀』は、神武天皇(注1)の名^{めいかむやまといわれひこほほでみ}神日本磐余彦火々出見

^{かむやまといはれびこ}(神倭伊波禮毘古)と書く。神武の即位を^{えと しんゆう}干支の辛酉年とする神武紀元は、辛酉革命

説(注2)に従っているといわれる。神武天皇の名に^{やまと}日本」という後の国名になる漢字が使われているが、日本という国名が中国史書に初めて使われるのは『旧唐書』「倭国・日本伝」(注3)からで、天武朝の第6次遣唐使(702年)以後とみられる。また、紀元には神武元年から持統11年まで歴代1357年間にわたって天皇号が使われているが、先年、飛鳥池遺跡から出土した「天皇聚口弘口」という墨書木簡など「天皇」の文字資料(注4)が増加し、じっさいに天皇号が使われたのは飛鳥時代にはいつてからという考えが広がっている。

天皇の年齢は、神武から開化まで9柱中、6柱が100歳をこえ、戦前から神武の即位年を古くしたため、天皇の名前には伝承があつて数を増やせないで、初期の天皇の年齢を引き延ばしたという「宝算伸張説」があり、紀元前六六〇年という神武即位年には疑問が出されてきた。

2. 皇后・皇妃は多くの場合、豪族の子女が入れられ、皇族の男子(王)は多く地方豪族の始祖・遠祖とされているが、氏の出自を天皇系譜に結びつける後代の作為が指

摘されている。神武の皇后の名前は^{ひめたたらいすずひめ}媛蹈鞬五十鈴姫命(富登多多良伊須須岐比賣

命・比賣^{ひめ}多々良伊須氣余理比賣^{たたら}(注5)である。記紀とも「たたら」踏鞴・多々良)という外来系の新しい言葉を使っている。人力でおこした鞴の風を製鉄炉や鍛冶炉における踏鞴を駆使した鍛冶・製鉄の「手人」集団が河内・大和に蟠踞するのは、5世紀後半以後～6世紀末である。

3. 陵墓記載の年代は、記紀の干支年代と西暦のみを示した。記紀の神武紀元に対置できる、科学的な古代史・考古学の年代観は今のところ存在しない。戦後、考古学者がすすめてきた年代遡上の試みには、明治以来の国民国家的ナショナリズムが影をおとしている(注6)。
4. 戦後の古代史論議では平原生墳墓を天照大神の墓に比定したり、箸墓古墳(倭迹々日百襲姫命墓)を卑弥呼の墓に比定したりする論議がアマチュアだけではなく専門の歴史・考古学者にまでもひろがった。これは、歴史と神話・伝承を混同したり、あるいは反対に倭迹々日百襲姫命墓という伝承のある箸墓を、根拠なく卑弥呼の墓にしたりする。戦後の半世紀にわたる神話と歴史の混同は、邪馬台国近畿説で固まった考古学界は「(大和の)邪馬台国から大和政権へ」という歴史の方向にまとまりはじめている。しかし、奈良県を「大和」というようになったのは、果たして「魏志倭人伝」が書かれた3世紀まで遡るであろうか。こんなことさえ口々に論じていない。(注7)。
5. 神武紀元で、後代のいわゆる「弥生時代～縄文時代」に相当する記紀の陵墓記載は検討に値しない。しかし本稿の論点である「陵墓(古墳)はどこに造られたか」「天皇を擁立した豪族の墳墓はどこ作られたか」「墓制(墳墓・棺の形)、葬送儀礼はなぜ変わったのか」、「須恵器、馬具、鉄製甲冑、鍛冶工具、鉄鋌、鉄滓などを副葬した葬送儀礼の起源」などを考える手がかりとして、飛鳥以前の天皇陵・豪族墓・群集墳をめぐる氏族伝承や被葬者像。陵墓記載では、天皇陵がいつから后妃を合葬するか。飛鳥以前に合葬例があるかどうかなどを記紀から探ってみた。

天皇・即位年・崩年 日本書紀(古事記)	宮・皇后・日本書紀(古事記)	陵墓・日本書紀(古事記)
1神武・神白茅鬘余彦(注1) 660B.C.・神武即位年・辛酉 1月1日 (注2)127歳(137)	畝火之白橿原宮・(畝傍橿原宮) 日向の吾平津媛 媛踏鞴五十鈴姫命	畝傍山東北陵(畝火山北方の白橿の尾の上)

<p>かむめなかわかわみみ 2 綏靖・神 淳名川耳</p> <p>580B.C.・紀元80年 84歳(45)</p>	<p>葛城高丘宮(葛城高岡宮) 五十鈴依姫命</p>	<p>倭の桃花鳥田丘上陵 (衝田岡)</p>
<p>しきつひこたまでみ 3 安寧・磯城津彦玉手看</p> <p>547B.C.・紀元113年 57歳(49)</p>	<p>片塩浮穴宮(片塩浮穴宮) 淳名底仲姫命</p>	<p>畝傍山南・御陰井上陵 みほと (御陰)</p>
<p>おおやまとひこすきとも 4 懿徳・大日本彦耒友</p> <p>509 B.C.・紀元151年 77歳(45)</p>	<p>輕曲峽宮(輕之境岡宮) 天豐津姫命</p>	<p>まなごだに 畝傍織沙谿 (畝傍山之真名子谷)</p>
<p>みまつひこかえしね 5 孝昭・觀松彦香殖稻</p> <p>474B.C.・紀元186年 114歳(93)</p>	<p>葛城腋上宮(腋上池心宮) 世襲足姫</p>	<p>わきがみのほかたやま 掖上博多山陵</p>
<p>やまとたらしひこくにおしひと 6 孝安日本足彦国押人</p> <p>391B.C.・紀元269年 137歳(123)</p>	<p>葛城室之秋津嶋宮 (室秋津嶋宮) 押姫</p>	<p>玉手丘上陵</p>
<p>おおやまとねこひこふとに 7 孝靈日本根子彦太瓊</p> <p>289B.C.・紀元371年 128歳(106)</p>	<p>黒田盧戸宮(黒田盧戸宮) 細姫命</p>	<p>片岡馬坂陵 箸墓伝承の倭迹々日百襲姫命 (孝靈紀二年条)</p>
<p>おおやまとねこひこくにくる 8 孝元大日本根子彦国牽</p> <p>213B.C.・紀元447 116歳(57)</p>	<p>輕之堺原宮(輕境原宮) 薨色謎命</p>	<p>劔池嶋上陵(劔池中岡池陵)</p>
<p>わかやまとねこひこおひひ 9 開化稚日本根子彦大日々</p> <p>156B.C.・紀元504 115歳(63)</p>	<p>春日之伊邪河宮(春日卒川宮) 伊香色謎命</p>	<p>春日率川坂本陵、一本云く、坂上陵 (伊邪坂上陵)</p>
<p>10 崇神・ みまきいりひこいにえ 御間城入彦五十瓊殖</p> <p>96B.C. 紀元564</p>	<p>師木水垣宮(磯城瑞籠宮) 御間城姫</p>	<p>山野辺道上陵。倭迹々日百襲姫命、大物主神の妻となり、大市に葬る。箸墓伝承(注7)</p>

120(168)		(倭日子命、この王の時、始めて陵に人垣を立てき)
----------	--	--------------------------

注1: 神武という漢風諡号はいわゆる諡號(生前の行跡によって名づけられた追称)で、神武から持統までは藤原不比等の撰、文武から光仁までは淡海御船の撰という。(飯田季治『日本書紀新講』)

注2: 辛酉革命説「記・紀所伝は、もちろん歴史的事実とは思われず、神武天皇自体も、天皇による日本支配の歴史を説明するために造作されたとする意見が強い。神武即位の辛酉の年を、『日本書紀』の紀年より算定すれば、B.C.660年となるが、讖諱説もとずく辛酉革命説によって、推古朝のころに案出されたのではないかといわれる。しかし伝承のなかには、東征伝説は5、6世紀の政情にもとずいて作られているとする説もあるように後代の政治情勢や、宗教・習俗を反映している部分もあり、日本古代史研究の史料としてはたいせつである。(直木幸次郎)『新編日本史辞典』東京創元社」

注3: 『旧唐書』「倭国・日本伝」「日本国は倭国の別種なり。その国日辺にあるを以て、故に日本を以て名となす。あるいはいう、倭国は自らその名の雅ならざるを惡み、改めて日本となすと。あるいはいう、に本は旧小国、倭国の地を併せたりと。」

注4: 「天皇」の文字資料「大阪府羽曳野市の野中寺弥勒像台座銘に、「丙寅」という干支が刻まれているので、六六六年、天智称制五年にあたる。この銘文に「天皇」とあり、このころ天皇という称号が使われていたという解釈ができる。もう一つの史料は大阪柏原市の松丘山から出土したと伝えられる「船王後墓誌」で、「戊辰年」(六六八年)とあって、「天皇」という文字が五ヶ所にある。それぞれが敏達天皇、推古天皇、舒明天皇をさしているが、少なくとも「戊辰年」に「天皇」という言葉が用いられているならば天智朝のことである。(千田稔『飛鳥—水の王朝』中公新書59ページ)」

注5: 推古4年、(596)の飛鳥寺造営に動員された金属加工技術者に関して『元興寺伽藍縁起竝流記資財帳』に引用されている『塔露盤銘』には「爾時使作金人等、意奴弥首名辰星也、阿沙都麻首名未沙乃也、鞍部首加羅爾也、山西首部鬼也、此四部首為將、諸手作業也」と書かれている。この「四部首」に率いられた「諸手」とは、「意奴弥首」(忍海手人)「阿沙都麻首」(朝妻手人)「鞍部首」(鞍作手人)「山西首」(河内手人)と理解されている(浅香年木 1971年)。

注6: 昨今、日本の考古学界で起きた列島上の人類史を7~80万年前まで遡上させようとした旧石器遺跡捏造の試み(補注1 奥野正男『神々の汚れた手』)、邪馬台国から大和政権への連続性を想定し卑弥呼の墓を箸墓古墳に比定する年代上の根拠を求めて古墳時代の開始時期を従来の4世紀から100~200年遡上させようとした邪馬台国機内説にたつ考古学者の試み(補注2: 奥野正男『三角縁神獸鏡の研究』「内

藤湖南の邪馬台国畿内説と明治のナショナリズム)、AMS法による炭素14年代測定により、弥生時代の始まりを紀元前 1000 年まで溯らせる国立歴史民俗博物館(暦博)の主張や手法(補注3:考古学会内の批判を抑えるために暦博の遡上説特別展に天皇を招待した)には、年代決定法においてアメリカの研究を受け入れた日本考古学界のアジア社会にたいする自国中心主義、アメリカの文化的植民地化した文科省・文化庁行政に顕著な反アジア的ナショナリズムがうかがわれよう。

注7:奥野正男「内藤湖南の邪馬台国畿内説と明治のナショナリズム」(HP「古代史の窓」)

天皇・即位年・崩年 日本書紀(古事記)	宮・皇后・日本書紀(古事記)	陵墓・日本書紀(古事記)
11垂仁天皇 ^{いきめいりびこ} ・活目入彦 五十狭茅 ^{いさち} (伊久米伊理比古伊佐知命)153歳 96B.C. 紀元564	師木玉垣宮(纏向珠城宮)	菅原伏身陵(菅原御立野)奈良県生駒郡
12景行天皇・ おおたらしびこおしろわけ 大足彦忍代別 (大帯日古淤斯呂和氣) 106歳 西暦71年. 紀元731	纏向之日代宮(纏向日代宮)	山邊道上陵、大和国城上郡(磯城郡)
13成務天皇・ わかたらしびこ 稚足彦・(若帯日子) 107歳(95) 西暦131年. 紀元791	志賀高穴穗宮(高穴穗宮)	(沙紀多他奈美)
1神功皇后・氣長足姫尊 (息長帯比賣)100歳 崩年紀元929年 西暦269年	稚櫻宮 66年条(西暦266)に、 晉起居注「倭女王遣使」 記事(後人書入:注1)	狭城盾列陵、諸陵式に(狭城盾列池上陵。磐余稚櫻御宇神功皇后。大和国添下郡にあり)

2 仲哀天皇・足仲彦 (帶 中日子) 52歳。 西暦193年・紀元853	穴門之豊浦宮・筑紫之 壽志比宮(穴門豊浦宮・ 權日宮)	熊襲の矢に中りて崩ず。 (河内恵賀陵)
3 蒼田・応神天皇 <small>おおささぎのみこと</small> 大雀命(品陀和氣命) 西暦270年・紀元930 年 崩年 111歳	輕嶋之明宮(明宮) 雄略紀9年条に応神陵 を「 <small>いちひこ</small> 蓬菓丘蒼田陵」と記 載(注2:田邊史・博孫の 埴輪馬の話)。	応神紀に陵墓記載なし。 (川内恵賀雲伏岡陵)、延 喜式に「恵我藻伏岡、河 内国志紀郡(今、南河内 郡)」
<small>おおささぎ</small> 大鷦鷯・仁徳天皇 (大雀命) 83歳 西暦313年・紀元973 年	難波之高津宮(難波高津 宮)	百舌鳥野陵
<small>いざほわけ</small> 5 去來穗別・履中天皇 (伊邪本和氣) 64歳 西暦400年・紀元1060 年	伊波礼之若桜宮 (磐余稚桜宮) 蘇我滿智ら國事を執る (注3:履中紀2年条)	百舌鳥耳原陵(毛受)
<small>たちひのみずはわけ</small> 6 多遲比瑞齒別・反 正天皇 76歳 西暦406年・紀元1066 年	多治比之芝垣宮(丹比 柴垣宮)	耳原陵 (毛受野)
<small>おあさつまわくごのすくね</small> 7 雄朝津間稚子宿禰・ 允恭天皇(男淺津間若子 宿禰) 76歳 西暦412 年・紀元1072年	遠飛鳥宮	河内長野原陵
6 穴穗・安康天皇(穴 穗)66歳 西暦454年・ 紀元1114年	石上之穴穗宮(石上穴 穗宮)	菅原伏見陵

<p>おほつせのわかたけ 7 大泊瀬幼武・雄略 天皇(大長谷若建)(124 歳) 西暦457年・紀元 1117年</p>	<p>長谷朝倉宮(泊瀬朝倉 宮) 史部の身狭村主・ 青、檜隈民使・博徳らを 寵愛(注4:大悪天皇)</p>	<p>河内多治比高鷲 百濟・武寧王の主嶋出生 記事(注5:雄略5年辛丑 夏四月条、武寧王墓誌)</p>
<p>しらがたけひろくにおしわかやまと 8 白髪武広国押稚日本 ねこ 根子・清寧天皇 西暦480年・紀元1140 年</p>	<p>伊波礼之麩栗宮(磐余 麩栗宮)</p>	<p>河内坂門原陵 諸陵式に河内国古市郡 (今、南河内郡)に在り。</p>
<p>をけ 9 弘計・顯宗天皇 西暦485年・紀元1145 年</p>	<p>近飛鳥宮(近飛鳥八釣 宮)</p>	<p>片岡石坏岡上</p>
<p>おけ 10 億計・仁賢天皇 おけ (意祁) 西暦488年・紀元1148 年</p>	<p>石上広高宮(石上広高 宮)</p>	<p>埴生坂本陵</p>
<p>おほつせのわかさきぎ 小泊瀬稚鷯・武烈天 皇西暦499年・紀元11 59年</p>	<p>長谷之列木宮(泊瀬列 城宮)</p>	<p>片岡石坏岡上</p>

注1:注166年条(西暦266)に、晋起居注「倭女王遣使」記事(後人書入)

注2:雄略紀9年条、田邊史・博孫の埴輪馬の話。応神陵を「^{いちひこ}蓬粟丘菅田陵」と記載

注3:履中紀2年条、蘇我満智ら国事を執る

注4:史部の身狭村主・青、檜隈民使・博徳らを寵愛(大悪天皇)

注5:雄略5年辛丑夏四月条、百濟・武寧王の主嶋出生記事(武寧王墓誌)

Ⅱ.古市・百舌鳥古墳群と河内の渡来氏族

1) 各遺跡の概況

畿内地方で鍛冶関連遺物を出土している遺跡は、管見に触れただけで31カ所がある。これらは、大阪府下の百舌鳥地域に4カ所、大泉地域に5カ所、枚岡地域に3カ所があり、集中分布する。奈良県下においても、布留・脇田・忍阪の3遺跡に鉄滓出土が周知される。兵庫県東部の尼崎地域に2カ所、京都府城陽地域で1カ所の散在的な分布が認められる。さらに畿内周辺部の滋賀県に5カ所、兵庫県に2カ所、和歌山県に5カ所で鉄滓・羽口が出土する。以下、各遺跡について、その概要を述べる。

〈陵南地域〉

陵南北遺跡⁽⁷⁾は、石津川の支流、百済川と美濃川によって挟まれた河岸段丘上に形成されている。遺構は、鍛冶炉2カ所・炉址・溝群・落ち込みが検出された。鍛冶炉は、溝によって削平されているが、炉床・側壁が残存していた。その周辺からは多量の鉄滓・羽口が出土している。落ち込み3は、一辺2.5mの隅丸方形の土壇で、鉄滓・羽口が出土しており、炉址に伴うものと推察されよう。落ち込み1は、深さ0.6~0.7mを測り、鉄滓・羽口以外に製塩土器・須恵器・木製鞍・鞘・田舟・木製刀・石製刀子などが共伴している。鍛冶炉2カ所は、主軸・配置から、これらが1対となって配されていると考えられる。遺構群の年代は、陶色TK 208~47型式の須恵器から、5世紀中~末葉に比定される。したがって、集落内において鉄器製作・木製品の加工・製塩が行われたことが窺える。

土師遺跡⁽⁸⁾は、百済川の支流である美濃川と盆田川によって形成された段丘上に位置する。遺跡は、5世紀中~6世紀中頃にかけて営まれた集落で、掘立柱建物・大溝・井戸などの遺構とそれに伴う須恵器・土師器をはじめ、埴輪円筒棺・子持勾玉・製塩土器を出土している。特に、集落中央部にて埴輪円筒棺8基が検出されたことや、百舌鳥古墳群の造営と集落の消長が一致することから、土師部と呼ばれる古墳築造技術者集団の集落に比定されている。鉄滓は、遺跡東部の調査区(27区)から7点が出土している。そのうち第1地区の土壇4から土師器・木炭片が共伴し、5世紀後半とされる。また、土壇7から羽口が検出された。

東上野芝遺跡⁽⁹⁾は、石津川の支流、百済川左岸の洪積段丘上に位置し、陵南遺跡の対岸となる。遺構は、掘立柱建物7棟・土壇群・溝址等が検出され、須恵器・土師器の他に製塩土器が多

量に出土している。とりわけ、土壌5内より鉄滓・羽口が若干出土し、5世紀後半に比定される。

太平寺遺跡⁽¹⁰⁾は、石津川中流域にあたり、旧河道の氾濫平野内に立地する。遺構は、5世紀後半の掘立柱建物2棟・溝2条などが検出され、多量の須恵器・土師器に伴って鉄滓・羽口・砥石が出土した。その量は、鉄滓6,280g・羽口44個体・砥石7点であり、百舌鳥地域で現在のところ最も出土量が多い。鍛冶炉は、検出されていないが、椀形滓の分布から周辺に存在すると推定される。立地的に、陶邑古窯址群の支谷を形成する石津川水系にあたり、多くの完形品を含む須恵器の焼けひずみや欠損を有する不良品が出土することから、深田遺跡と同様に須恵器の集散・選別に関する集落とされる。

深田遺跡⁽¹¹⁾は、太平寺遺跡の上流にあたり、多量の須恵器に伴って羽口が1点ほど出土しており、5世紀後半に比定されている。四ツ池遺跡⁽¹²⁾では、古墳時代中期(5世紀後半)の旧河道1層より、鉄滓・羽口が少量出土している。

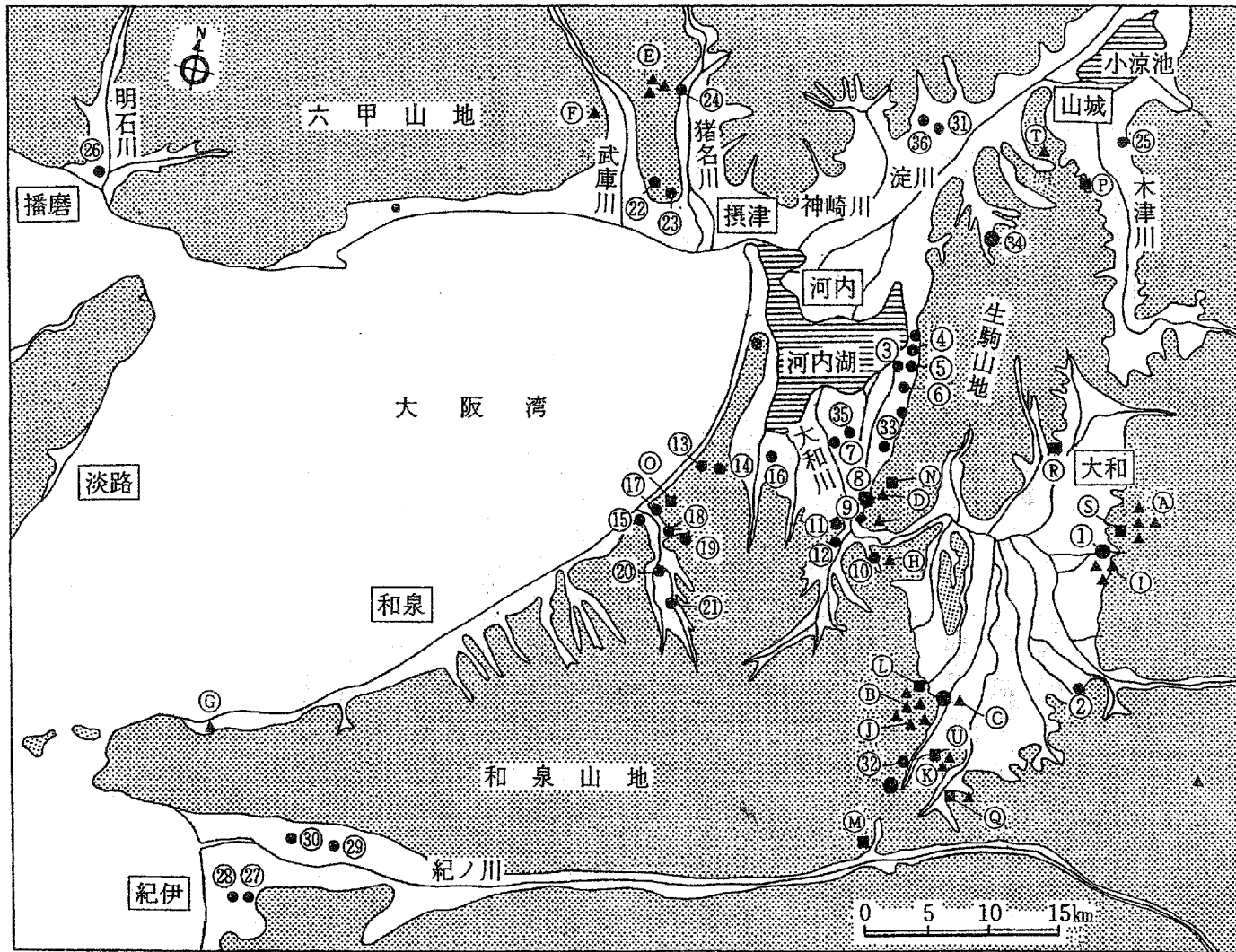
〈大県地域〉

大県遺跡は、旧大和川と石川が合流する生駒山南麓に位置し、高尾山西麓の扇状地上に立地する縄文時代早期～鎌倉時代にかけての集落址である。昭和57年に柏原市教育委員会の下水道建設に伴う調査によって発見され、以後調査が継続されている。遺跡は、堅下小学校南側と天理教教会を中心とした扇状地上に立地し、北側と南側に小支谷が認められる。その中央部では、7世紀中葉に建立された大里寺の伽藍が確認されており、鍛冶関連遺構群はその下層から検出される。鍛冶関連遺構は、3地点から鍛冶炉10カ所、配石遺構・炭置場・建物等が発見される。

下水道(宮の前線)に伴う調査⁽¹³⁾は、遺跡南部の鐺比古神社参道下で、鍛冶炉5カ所・炭層4カ所・配石遺構・掘立柱建物などが検出された。炉跡は、配石遺構上に3カ所設けてあり、それに接して掘立柱建物があり建物が工房的性格を持つと考えられる。炉の周囲には炭層があり、その配置から炭置場とみなすことができる。炉は、共伴する土器より陶邑MT85～TK209型式に比定され、6世紀中～末葉に操業がなされていたと推察される。鉄滓は、140m²内の狭い調査区から200kgほど出土しており、1m²の密度1.4kgとなり大県遺跡内でも出土量が最も多い。羽口は 羽口先端が50点以上、破片も含めると386点である。砥石も大小あり、荒砥・研磨砥30点ほどが出土している。

下水道(宮の橋線)に伴う調査⁽¹⁴⁾は、遺跡北部の天理教教会へ通ずる道路下にあたる。遺構は、鍛冶炉1カ所・溝2条・炭層2カ所が検出された。鍛冶炉は、扇状地南斜面に立地し、南側に溝2が西流する。炉の周囲には、鉄分の凝固層があり、作業面とみられる。その西側には、炭層1・2が位置し、炭置場と考えられる。特に鍛冶炉は、周辺より陶邑MT15～TK10型式の須恵器が出土しており、6世紀初頭～前葉に比定される。鉄滓は、B層を中心とした遺物包含層から191kgほど出土し、羽口・砥石128個体が共伴する。鍛冶関連遺構は、7世紀中葉に建立される大里寺寺域の下層にあたり、5世紀前葉を初現とし7世紀前葉まで操業されたと考えている。出土遺物は、韓式系土器・製塩土器をはじめ木器・獣骨・鹿角製品などがあり、一般集落と比較すると獣骨・鹿角の加工品が多く認められる。

堅下小学校の屋外運動場建設に伴う調査⁽¹⁵⁾では、掘立柱建物7棟・鍛冶炉4カ所・溝・井戸



● 鍛冶集落(鉄滓・輔羽口)
 ▲ 鉄滓出土古墳
 ■ 鍛冶工具出土古墳

- 鍛冶集落
- 1、布留遺跡 — 布留群
 - 2、忍阪遺跡 — 忍阪群
 - 3、脇田遺跡 — 忍海群
 - 4、西ノ辻遺跡 — 枚岡群
 - 5、神並遺跡 — 枚岡群
 - 6、縄手遺跡 — 枚岡群
 - 7、友井東遺跡 — 友井群
 - 8、大泉遺跡 — 大泉群
 - 9、大泉南遺跡 — 大泉群
 - 10、田辺遺跡 — 古市群
 - 11、土師の里遺跡 — 古市群
 - 12、古市遺跡 — 古市群
 - 13、山之内遺跡 — 依羅群
 - 14、今池遺跡 — 依羅群
 - 15、四ツ池遺跡 — 依羅群
 - 16、長原遺跡 — 依羅群
 - 17、東上野芝遺跡 — 依羅群
 - 18、陵南北遺跡 — 陵南群
 - 19、土師遺跡 — 石津川群
 - 20、太平寺遺跡 — 石津川群
 - 21、深田遺跡 — 石津川群
 - 22、若王寺遺跡 — 猪名群
 - 23、下坂部遺跡 — 猪名群
 - 24、小戸遺跡 — 猪名群
 - 25、芝ヶ原遺跡 — 猪名群
 - 26、吉田南遺跡 — 猪名群
 - 27、鳴神遺跡 — 紀伊群
 - 28、秋月遺跡 — 紀伊群
 - 29、川辺遺跡 — 紀伊群
 - 30、西田井遺跡 — 紀伊群
 - 31、郡家川西遺跡 — 紀伊群
 - 32、名柄遺跡 — 紀伊群
 - 33、郡川遺跡 — 紀伊群
 - 34、森遺跡 — 紀伊群
 - 35、巨摩摩寺下層 — 紀伊群
 - 36、新池遺跡 — 紀伊群

図 47 鍛冶関連遺跡分布図

● 鉄滓出土古墳
 A、石上・豊田古墳群(7基) D、平尾山古墳群 (6基) G、白峠山古墳 J、笛吹古墳群(3基) M、五条猫塚古墳 P、郷土塚4号墳 S、ホリノヲ2号墳
 B、忍海古墳群 (8基) E、雲雀山古墳群 (3基) H、田辺1号墳 K、境谷4号墳 N、平尾山古墳群(雁多尾畑支群) Q、イノオク1号墳 T、清水谷古墳
 C、石光山1号墳 F、関西学院構内古墳(1基) I、柚之内古墳群(5基) L、忍海16号墳 O、百舌鳥大塚山古墳 R、菩提寺2号墳 U、巨勢山古墳群(4基)

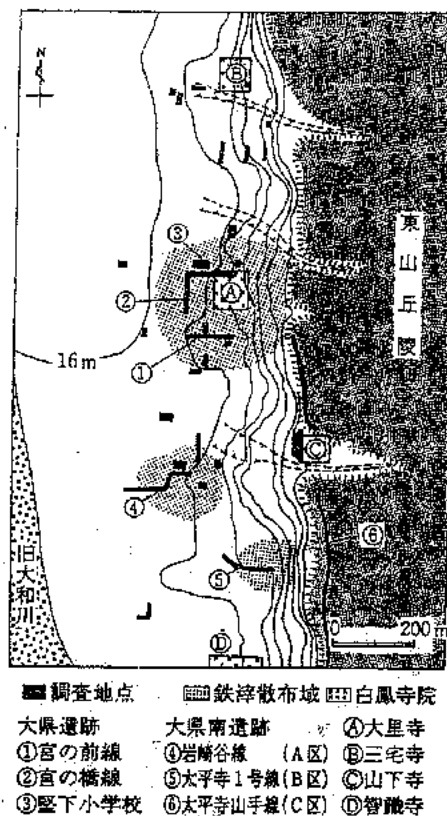
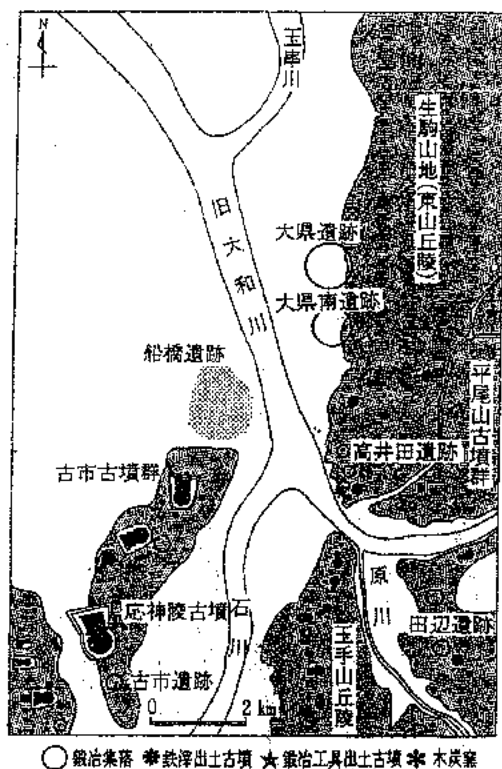


図48 大泉・大泉南遺跡の位置と範囲

等が検出された。鍛冶炉は、1基を除くと屋外の火罌型鍛冶炉で、炉床には椀形滓が残存しているものも見受けられる。特に鍛冶炉9は、溝で区画された中央部に配置され、その周囲に柱穴を配す構造で鍛冶工房と考えられる。掘立柱建物は、南北棟・総柱建物があり、6世紀末～7世紀前葉と7世紀末～8世紀前葉の時期の2群に区分される。前者は、掘立柱建物と鍛冶炉9の工房からなり、後者は大里寺に伴う建物群である。出土遺物は、土器類の他に鉄滓・羽口・砥石が多量に発見された。遺跡の範囲は、鉄滓出土地点を集積すると、扇状地を中心に東西250×南北300mとなり、河内平野最大の鍛冶専門集落と理解される。その中央部に、大里寺が建立される時期になると、鍛冶工房群と重複することから、7世紀中葉前後を境に操業が縮小あるいは停止すると推察される。

大泉南遺跡⁽¹⁶⁾は、大泉遺跡の南300mの扇状地上に立地し、北側に岩崎谷川が西流する。A地区は、下水道(岩崎谷線)に伴う調査によって、柱穴・土壌が検出されており、その際に鉄滓8kg・羽口・砥石が出土している。その年代は、6世紀末～7世紀前葉に比定される。B地区は、下水道(岩崎谷線)の建設に伴う調査で、鍛冶炉4カ所・炭層・土壌・溝群が検出された。2号炭窯は、隅丸方形を呈す炉であり、陶邑TK73型式に比定される。他に5世紀後半の3号炉、6世紀後半の4号・5号炉が検出されており、5世紀前葉～7世紀初頭にかけての工房が存在すると推察される。遺物は、鉄滓14kg・羽口・製塩土器・砥石・韓式系土器・土師器・須恵器が出土している。このように、2地区に鍛冶炉群が発見されることから、遺跡の範囲も今後の調査によって広がると考えられる。特に扇状地裾部に5世紀～7世紀前半代のものが分布し、山麓部に7世紀中葉以降の工房群の移動が窺える。C地区は、東山丘陵緩斜面にあたり、農道建設に伴っ

て調査⁽¹⁷⁾された。鍛冶遺構は、炉址2カ所が検出され、工房も確認されている。年代は7世紀前半～8世紀前葉とされるが、7世紀後半を中心に操業され、同地域で最も新しい一群である。

〈枚岡地域〉

神並遺跡⁽¹⁸⁾は、生駒山西麓の低位段丘上に立地する縄文時代早期～室町時代にかけての集落址で、石切剣箭神社の南側に位置する。鉄滓は、開析谷内の落ち込みから、炉壁・羽口・石製勾玉・有孔円板・製塩土器・土師器・須恵器が出土した。遺構の年代は、陶器TK 208～23型式にあたり、5世紀後半とされる。また、段丘上には掘立柱建物・溝などが検出される。

西ノ辻遺跡⁽¹⁹⁾は、神並遺跡西側に位置し、旧河道の下流にあたる。遺構は、掘立柱建物・落ち込み・導水施設などが検出された。鉄滓・羽口は、旧河道内より、5世紀後半の土器と共に出土した。

縄手遺跡⁽²⁰⁾は、生駒山西麓の扇状地上に立地した集落址で、溝内より5世紀後半代の土器に伴って鉄滓・羽口が少量出土した。この地域の鉄滓出土量は、各遺跡とも1kg未満で、羽口も20個体弱である。

〈古市地域〉

古市遺跡⁽²¹⁾は、羽曳野丘陵東端に位置する国府台地の下位段丘に立地する。7世紀代には、西文氏で著名な西琳寺が建立され、遺跡がそれらの氏族の集落地と推定されている。鉄滓は、寺域東辺外郭築地推定地下層において、掘立柱建物の柱穴や土壌から出土した。掘立柱建物は、SX 2と切り合っていることから、6世紀末～7世紀初頭に比定される。同時期のSX 10からは、羽口が5個体と鉄滓が検出されている。調査区が狭く、これ以上は明確にしえないが、寺院に先行した鍛冶工房の存在が推察しうる。また、土師の里遺跡からも鉄滓が出土している。

〈友井地域〉

友井東遺跡⁽²²⁾は、旧大和川の支流、長瀬川の自然堤防上に位置する。遺構は、掘立柱建物・土壌・溝群が検出され、土器類と共に鉄滓が出土した。特に、調査区北部では多量の炭と共に鉄滓を出土した溝や、湿地の中に落とし込んだような状態で多量の炭と焼土が検出されるなど、鍛冶遺構としての性格も強い。5世紀後半のものとされる。また、巨摩麿寺下層⁽²³⁾からも古墳時代後期(5世紀末)の遺物包含層より鉄滓が出土している。

〈交野地域〉

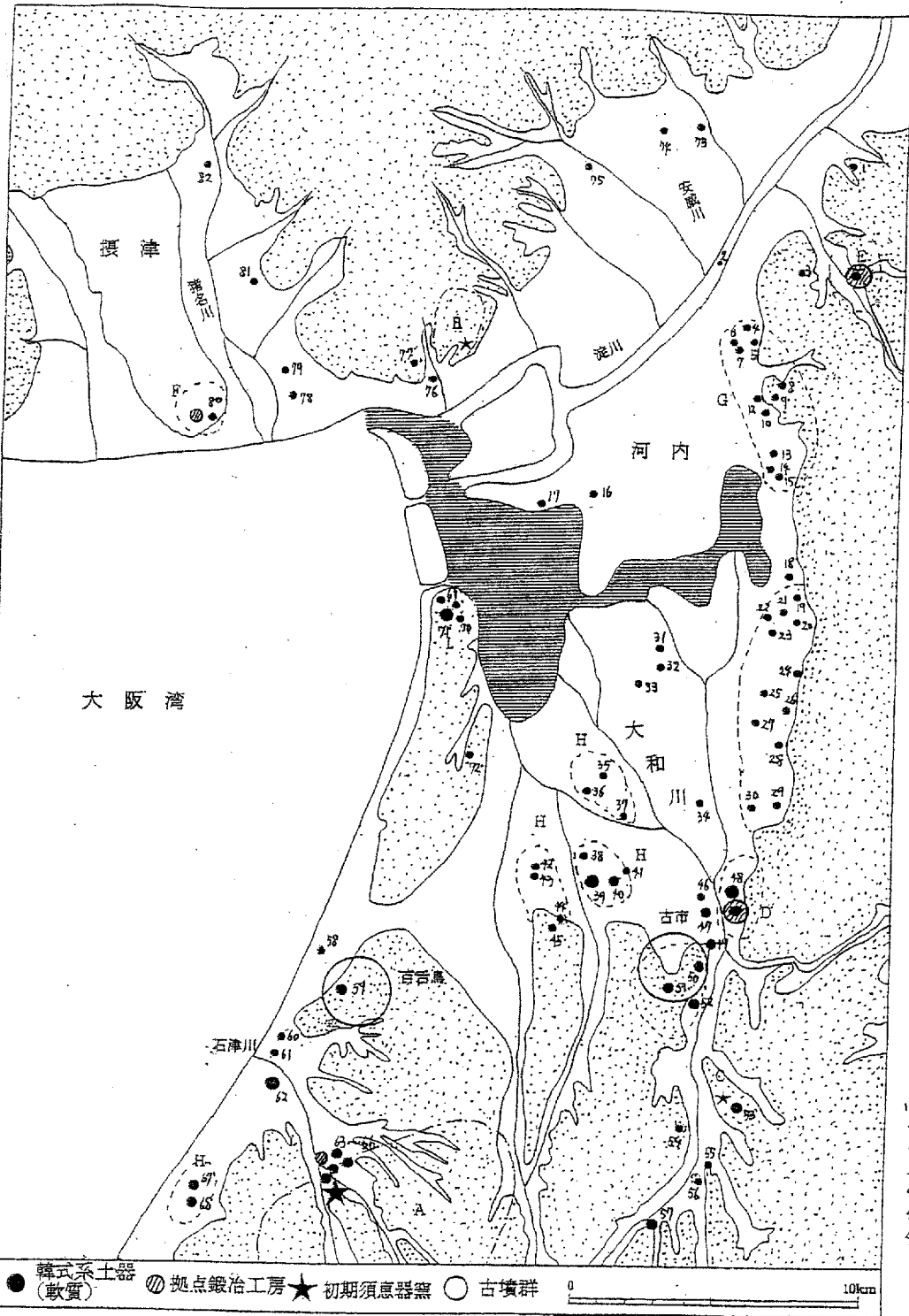
森遺跡⁽²⁴⁾は、生駒山地北部の倉治山西側にまたがる扇状地、いわゆる交野ヶ原に位置する。鍛冶関連遺物は、鍛冶炉のほかにも多量の羽口・鉄滓が5世紀末～6世紀初頭の溝・遺物包含層から出土している。北河内の拠点的な専業鍛冶集落である。

〈八尾地域〉

高安山西麓の扇状地に立地する郡川遺跡⁽²⁵⁾において、鉄滓・羽口が出土している。郡川遺跡は遺物包含層の出土で5世紀末と考えられる。

〈三島地域〉

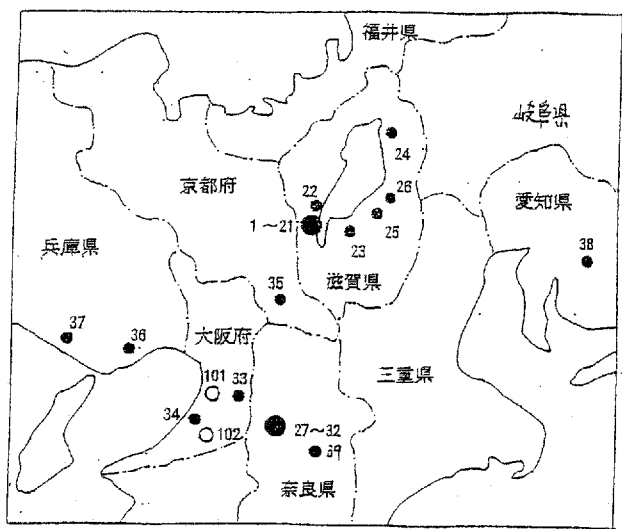
高槻市内の郡家川西遺跡⁽²⁶⁾・新池遺跡において、少量の鉄滓・羽口が出土している。前者は、古墳時代後期～飛鳥時代の柱穴から出土し、後者は、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物群に



- 生産工房
- A 陶器古墳地群
 - B 沢田古墳地群
 - C 一飯塚古墳地群
 - D 大泉鍛冶工房
 - E 森鍛冶工房
 - F 若手鍛冶工房
 - H 開港型集落
 - I 邊地施設
 - G 馬飼集落
- 韓式系土器出土地
- | | |
|----------|------------|
| 1. 茨城の山 | 46. 新田 |
| 2. 淀川川床 | 47. 船橋 |
| 3. 茄子作 | 48. 大津 |
| 4. 北木田 | 49. 西宮 |
| 5. 石宮 | 50. 柳屋 |
| 6. 神 | 51. 津山 |
| 7. 長保寺 | 52. 正倉 |
| 8. 森田井 | 53. 一飯塚古墳群 |
| 9. 中野 | 54. 千野 |
| 10. 南郷新島 | 55. 神山 |
| 11. 飯山 | 56. 明井 |
| 12. 飯山 | 57. 三石 |
| 13. 北条 | 58. 塚 |
| 14. スノ | 59. 大塚中町 |
| 15. 島田川 | 60. 船橋 |
| 16. 栗田中町 | 61. 日明山 |
| 17. 森山 | 62. 田代 |
| 18. 日下 | 63. 小坂 |
| 19. 西ノ | 64. 深田 |
| 20. 笠ノ | 65. 藤子 |
| 21. 神面 | 66. 飯尾 |
| 22. 鹿島川 | 67. 大園 |
| 23. 水尾 | 68. 木野 |
| 24. 泉原 | 69. 大津 |
| 25. 北島 | 70. 大塚中町 |
| 26. 磯子 | 71. 船橋下層 |
| 27. 池島 | 72. 東津 |
| 28. 西代 | 73. 船橋 |
| 29. 船川 | 74. 船橋川 |
| 30. 船川 | 75. 船 |
| 31. 梅葉 | 76. 五反田 |
| 32. 若江 | 77. 皇水南 |
| 33. 新家 | 78. 船橋南 |
| 34. 山崎 | 79. 上津島 |
| 35. 久野 | 80. 新夜 |
| 36. 久野 | 81. 船橋 |
| 37. 益川 | |
| 38. 城山 | |
| 39. 石原 | |
| 40. 八尾南 | |
| 41. 木本 | |
| 42. 大塚 | |
| 43. 大塚 | |
| 44. 上田町 | |
| 45. 丹比 | |

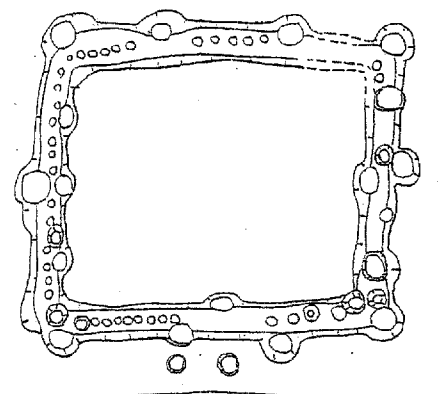
● 韓式系土器 (軟質) ● 拠点鍛冶工房 ★ 初期須恵器窯 ○ 古墳群 0 10km

河内の韓式系土器出土地と生産工房



畿内周辺の大壁建物の分布

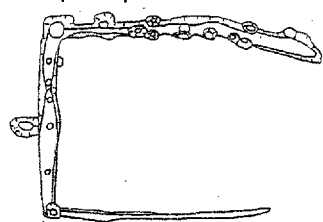
- 1~21 大津 35 森垣外 27~32 南郷遺跡群 33 大泉
 34 大園 36 上沢 37 寒風 38 矢迫 101 長原 102 小坂
 39 釜水谷



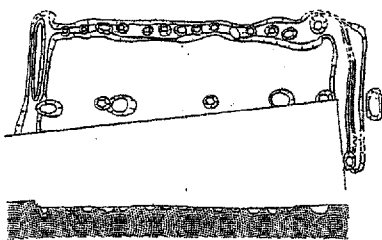
百済・擬止山遺跡

はる線物

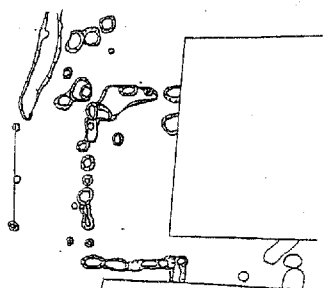
3m



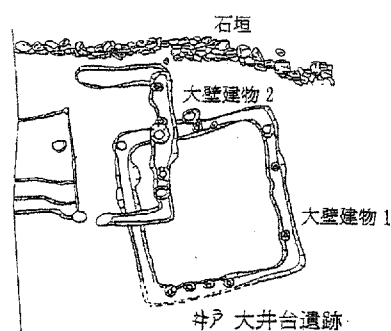
南郷柳原遺跡



南郷井柄遺跡

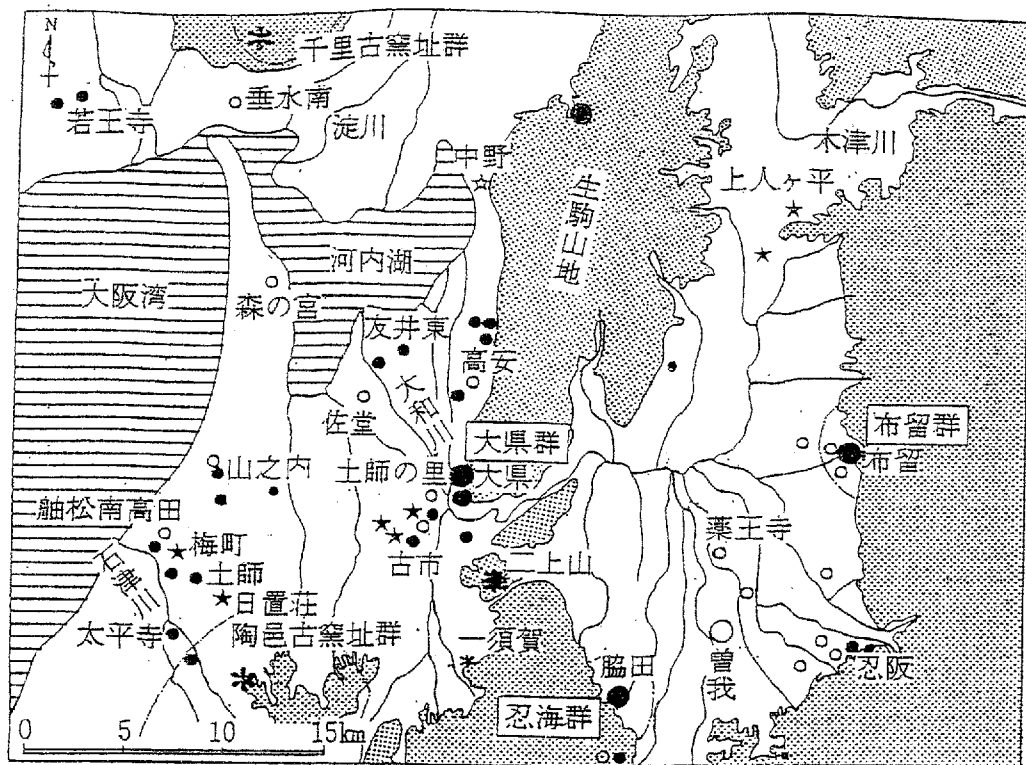


南郷安田遺跡12トレンチ.SB-2

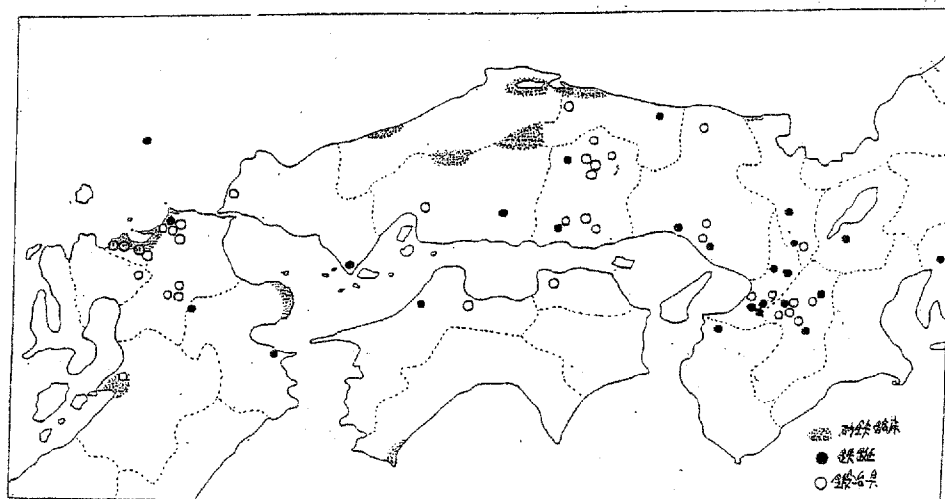


石垣 大壁建物2 大壁建物1 井戸 大井台遺跡

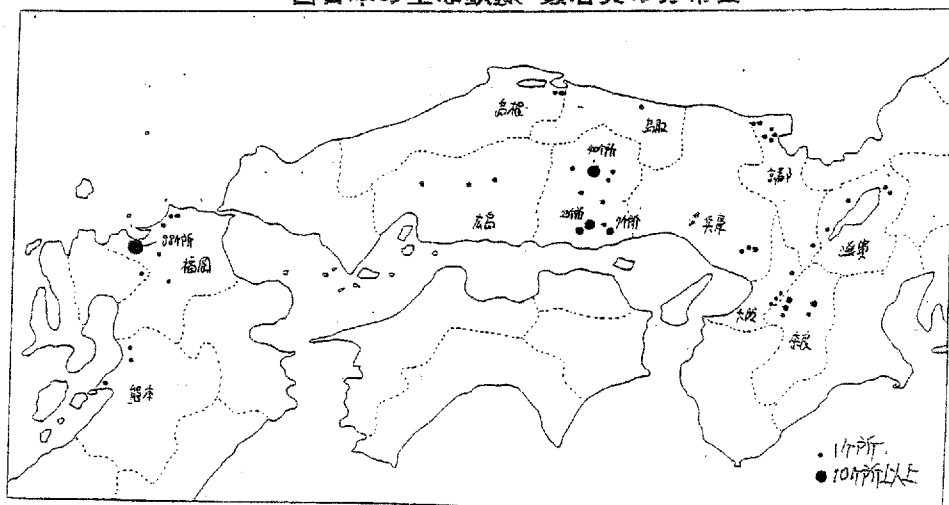
0 10m



● 鍛冶工房 ○ 玉作工房 ★ 埴輪工房 * 須恵器窯跡 ☆ 製塩集落 ※ 石切場(石棺) 畿内中樞部の生産工房(古墳時代)

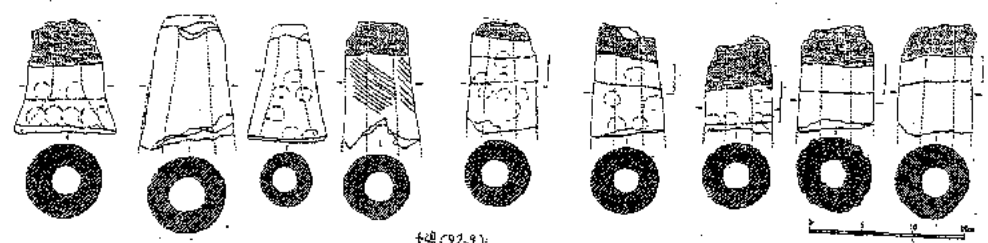


西日本の主な鉄滓・鍛冶具の分布図

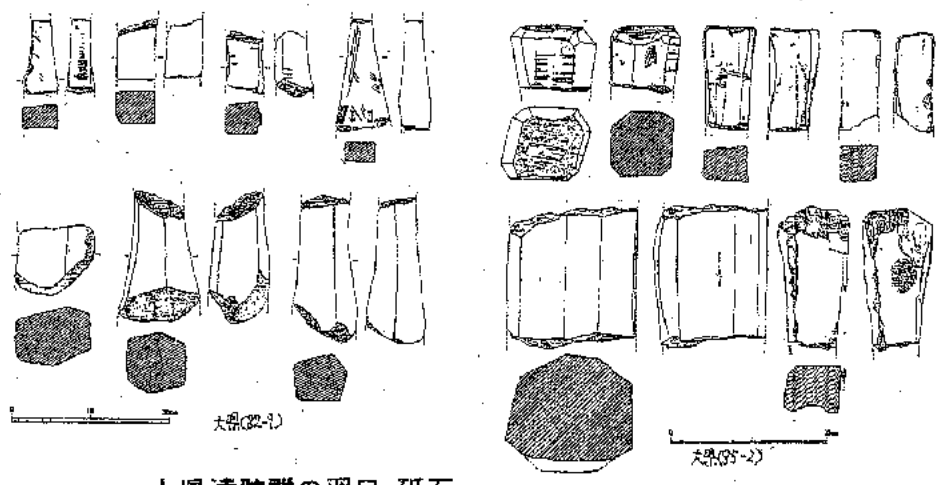


西日本の主な鉄滓・鉄滓供献の分布図

参考文献 花田 勝広 「倭政権と鍛冶工房」 『考古学研究』 第36巻3号 1989年
 花田 勝広 「古墳時代の鉄・鉄器生産工房」 『柏原市歴史資料館』 館報3号 1992年
 花田 勝広 「百濟政権と鍛冶工房」 『考古学研究』 第43巻2号 1996年
 花田 勝広 「手工業生産の展開と渡来人」 『埋蔵文化財研究会』 第41回 2000年
 花田 勝広 『古代の鉄器生産と渡来人』 2002年 近刊

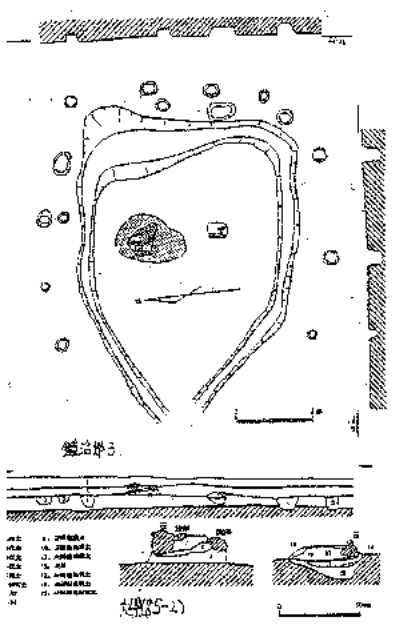


大泉(32-1)



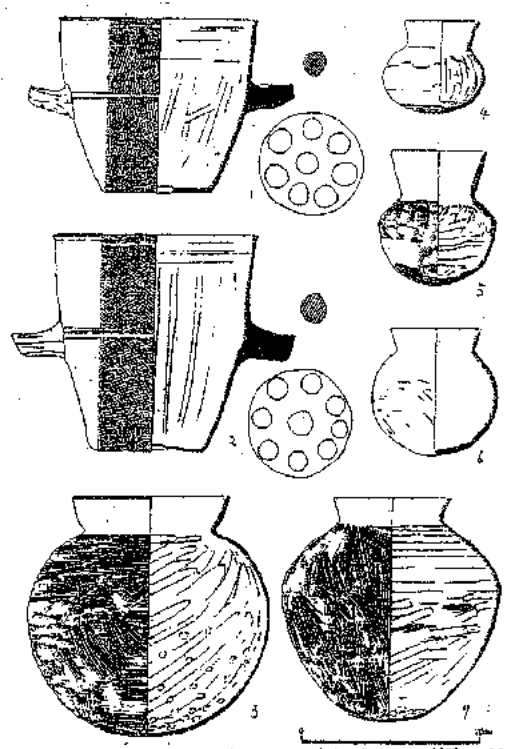
大泉(32-2)

大泉(32-3)



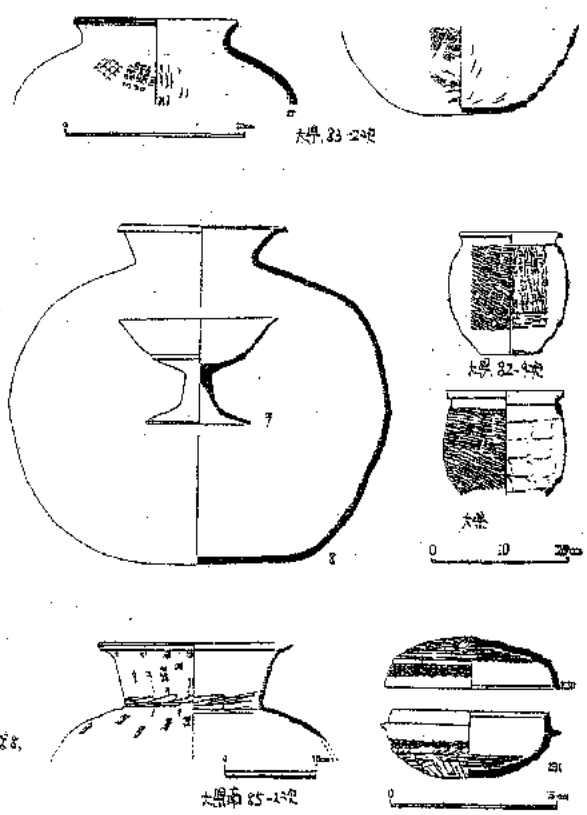
鍛冶炉

大泉遺跡群の羽口・磁石



大泉(35-1) SK-4 鉢と器 1~2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100

大泉遺跡群の韓式系土器・須恵器・土師器

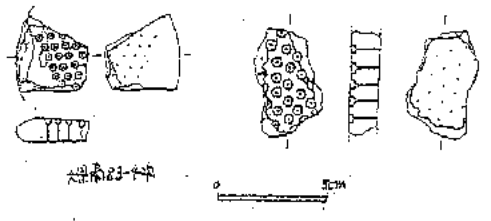


大泉(35-2)

大泉(35-3)

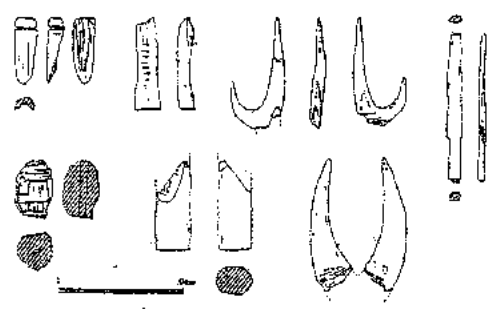
大泉(35-4)

大泉(35-5)



大泉(35-6)

ガラス鑄型



鹿角製品

伴う土壌内より鉄滓が出土し、5世紀末に比定される。

〈依羅地域〉

今池遺跡⁽²⁷⁾は、上町台地に続く中位洪積台地の東端に位置し、これより東は西除川旧河道の氾濫平野が広がっている。鉄滓・小鉄塊が出土したのは、遺跡北部（第1地区）と南部（第3地区）の2カ所であり、3 kmほど離れている。特に南部は、掘立柱建物1棟・溝3条・落ち込みなどが検出され、これらに伴って鉄滓・土師器・須恵器が出土した。北部においては、掘立柱建物・溝・井戸状遺構・ピット群が検出され、遺物包含層から鉄滓・小鉄塊の出土がみられた。年代は、5世紀後半とされる。

山之内遺跡⁽²⁸⁾は、上町台地の基部南西斜面に位置する縄文晩期～中世にわたる集落址である。遺構は掘立柱建物が数棟と土壌が検出されている。遺物は須恵器・土師器以外に製塩土器・鉄滓・羽口が出土し、5世紀後半～6世紀前半のものとされる。

〈布留地域〉

布留遺跡⁽²⁹⁾は、大和盆地の東辺中央部に位置し、高峰山麓から流れ出る布留川の一扇状地および段丘上に立地する。その範囲は、南北1.5×東西2 kmの段丘上で、4地区の遺構群からなる。遺跡は、縄文～室町時代まで断続的に営まれ、この地が拠点的地位を占めたのは縄文時代中～後期と古墳時代である。古墳時代の遺跡は、弥生時代後期に形成され、それが発展的に醸成したもので、古墳時代中期になると突如変化が認められる。堂垣内地区では、円礫を貼った祭壇状の埴輪配列があり、壮大な祭祀場とされる。その西方の里中地区は、布留川の支流である旧河道があり、鉄滓・羽口に伴って木製農具・容器・織機具・発火具・祭器具・建築材・刀剣装具・銅鏡・滑石および碧玉・同末製品などが出土しており、5世紀前葉～6世紀前葉のものとされる。また、南岸の柚之内木堂地区⁽³⁰⁾では、掘立柱建物9棟・竪穴住居22棟・大溝が検出され、5世紀後半～6世紀代とされる。大溝からは、鉄滓30 kg余りと羽口が発見され、「石上溝」とみられる。竪穴住居は重複しているが、そのうち1棟からは、鉄鉗・羽口・鉄滓・白玉・白玉石材等が出土しており鍛冶工房とみなされる。竪穴住居の年代は、6世紀前半頃（陶器TK10型式）に比定される。これらのことから、5世紀後半代の布留遺跡において、玉工房・鉄工房・木工房が出現したと考えられる。鉄滓は、5世紀前葉～8世紀代にかけての遺物包含層から出土しており、鍛冶工房が継続的に存在しているとみなされる。

〈忍海地域〉

脇田遺跡⁽³¹⁾は、葛城山東麓の丘陵裾野に立地する縄文時代晩期～平安時代の集落址である。遺跡内には、地光寺東廡寺と西廡寺があり、前者は双塔式の伽藍配置を持つ寺院で7世紀後半～末葉の創建と考えられる。後者は、壇上積基壇の塔跡が発掘され、新羅系の鬼面文瓦を出土しており8世紀前半と考えられる。昭和56年に橿原考古学研究所によって、両遺跡の中央部の調査がなされ、東西・南北200 mの範囲に鉄滓・羽口・鑿・銅滓・鉄斧の出土が確認されている。遺構は、鍛冶炉・炭置場等は検出されていないが、溝状遺構（SD62）・SX2・SX6から多量の鉄滓が出土している。特に、SX6は浅い土壌で鉄滓・羽口・土器類が出土し、そのうち鉄滓が付着した土師器埴がある。その年代は、6世紀後半～8世紀の幅で捉えられる。鉄滓の出土量

は、椀形滓 200 点前後であり、大和平野内で布留遺跡・南郷遺跡群に次いで量が多い。また、地形からみて鍛冶工房の中心は、西麩寺の丘陵上に存在すると推察される。

〈忍阪地域〉

忍阪遺跡⁽³²⁾は、奈良盆地東南部、桜井市の鳥見山と外鎌山に挟まれた小支谷内に位置する。遺跡は、栗原川の緩斜面に立地する縄文～古墳時代にかけての集落址である。古墳時代の遺構は、掘立柱建物・柵・柱穴・溝・土壌が検出され、土器類と共に鉄滓・羽口・鉄銚・勾玉・滑石未製品の遺物が出土している。その一つ S K 01 は 6 世紀中葉に比定されている。また、この地域が『日本書紀』の垂仁紀 39 年の条にみられる忍阪邑とされ、大王家の武器庫があった遺跡とされる。

〈巨勢地域〉

名柄遺跡⁽³³⁾は、葛城山東麓に位置し、古墳時代中期末の居館とされる遺構が検出された貼石のある居館内には、竪穴住居・掘立柱建物・土壌があり、円形土壌から土器類に伴って鉄滓・碧玉のチップが出土している。また、木製の刀剣把頭や鞘の未製品・漆壺も出土していることが注目される。遺構の年代は、5 世紀末～6 世紀前葉と考えられ、鉄滓出土土壌は、陶器 TK 23 型式に比定される。このことから、居館内に鍛冶工房・玉工房が存在していたとみなされる。

〈猪名川地域〉

若王寺遺跡⁽³⁴⁾は、西摂平野中央部の伊丹段丘の先端に立地する弥生時代後期～鎌倉時代にかけての集落址である。遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・大型土壌・溝群が検出された。鉄滓は、北方の溝址から須恵器・土師器・羽口と共に出土している。羽口は、完形品を含む 40 点余りが出土しており、直径 5 cm×長さ 13 cm 前後に復元できる。これらは、共伴土器より 5 世紀末～6 世紀初頭のもものとされる。また、掘立柱建物と鉄滓の関係は明確にしえないが、一部の建物が工房となる可能性がある。

下坂部遺跡⁽³⁵⁾は、若王寺遺跡の立地する伊丹丘陵よりさらに 3 km ほど先端にあたり、古墳時代の海浜部に位置する。遺跡は、弥生時代後期～古墳時代後期にかけて継続し、若王寺遺跡を母村とする集落と理解される。羽口は、2 次調査の際に遺物包含層より、土師器・須恵器に伴って出土した。その年代は、5 世紀末～6 世紀初頭とされる。

小戸遺跡⁽³⁶⁾は、猪名川が西摂平野に広がる部分に位置する弥生～奈良時代にかけての集落址である。鉄滓は、A 地区において弥生時代後期～古墳時代後期の 9 棟住居のうち 1 棟から出土した。竪穴住居は、一辺 4 m の方形住居と推察され、住居内より大小 10 点の鉄滓と炭が検出された。共伴の土器より古墳時代前期（布留 I 式併行期）とされる。

〈畿内縁辺部〉

吉田南遺跡⁽³⁷⁾は、明石川西岸の平野部に位置する弥生時代後期～鎌倉時代にかけての集落址である。古墳時代の集落は、東部微高地上に 90 棟の竪穴住居が検出されている。鉄滓は、竪穴住居 1 棟と大溝内で羽口と共に若干出土している。住居址は、一辺 5.5 m の方形住居で、床面に鍛冶炉があり、鉄滓・羽口が散乱し 5 世紀末～6 世紀初頭に比定されている。同時期の住居群は、5～7 棟で構成されている。

これら以外に京都の芝ヶ原遺跡⁽³⁸⁾、和歌山県の鳴神遺跡⁽³⁹⁾・秋月遺跡・野田地区遺跡・西田

表 7 鍛冶工房の消長

鍛冶工房	4世紀	5世紀					6世紀				7世紀			
		布留式 (新)	TK 73	TK 216	TK 208	TK 23	TK 47	MT 15	TK 10	MT 85	TK 43	TK 209	飛鳥 I	飛鳥 II
1、布留遺跡														
2、忍阪遺跡														
3、脇田遺跡														
4、西ノ辻遺跡														
5、神並遺跡														
6、縄手遺跡														
7、友井東遺跡														
8、大県遺跡														
9、大県南遺跡														
10、田辺遺跡														
11、土師の里														
12、古市遺跡														
13、山之内遺跡														
14、今池遺跡														
17、東上野芝遺跡														
18、陵南北遺跡														
19、土師遺跡														
20、太平寺遺跡														
21、深田遺跡														
22、若王寺遺跡														
23、下坂部遺跡														
25、芝ヶ原遺跡														
26、吉田南遺跡														
27、鳴神遺跡														
31、郡家川西遺跡														
鳥坂寺(寺院)														
海会寺(寺院)														
鍛冶集落区分	I期	II期					III期				IV期			
副葬品	鉄 鋌													
	鍛 冶 具													
	鉄 滓													

1・3・8・9、特定工房

寺造宮に動員された金属加工技術者に関して「爾時使作金人等、意奴弥首名辰星也、阿沙都麻首名未沙乃也、鞍部首名加羅爾也、山西首都鬼也、此四部首為將、諸手作奉也」と伝える『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に引用される『塔露盤銘』の記載は、その一応の原型を示すといえる。すなわち、ここで忍海首・朝妻首・鞍作首・河内首の「四部首」に率いられた「諸手」とは、いうまでもなく忍海手人・朝妻手人・鞍作・河内手人などに理解⁽⁷⁸⁾すべきものである。上記の群は、布留群・忍海群・大県群の拠点的なものうち、忍海手人(忍海群)、河内手人(大県群)がこれらの集団に該当する。忍海地域に居住する忍海氏は、東漢直氏の伝承で始祖が

党類 17 集団を率い来帰したとあり、『坂上氏系図』では 30 村主と現われているが、その中に『日本書紀』神功紀 5 年の条に、草羅城の虜人の末裔とみえる葛城地域四邑の漢人の村主がみなあげられている。忍海村主がすなわち忍海漢人であって、東漢直に統率される忍海邑の手人集団の首長と思われる。『肥前国風土記』によると、7 世紀初頭の新羅への侵略計画に際して「忍海漢人」を連れてきて、のちの肥前国三根郡漢部郷に居住させ兵器を作らせた⁽⁷⁹⁾と伝える。河内手人は、山西(河内)主都鬼が率いたとされており、6 世紀後半代の鍛冶集落の工人がこれに含まれると考えられる。特に 6 世紀後半の遺跡は現在のところ、大県・大県南・田辺・古市の 4 集落に限られており、大県專業集落がその核をなすと推察される。さらに、時代は降るが『続日本紀』養老 4 年(720)の条に「河内国若江郡正八位上河内手人刀子作広麻呂、改賜下村首姓、免

雑戸号」とあり、若江郡人の旧雑戸が改姓を求めた記事がある。同年、河内手人大足が改姓を要求しており、8世紀まで河内手人姓を持つものが確認できる。このうち、令制以後『延喜式』によると雑戸に組み込まれた鍛戸が46戸である。鍛戸の墓址は、太平寺3号墓・田辺4号墓の鉄滓副葬がみられる火葬墓の一部に該当するのであろう。

布留地域は、元興寺『塔露盤銘』に記された手人集団にその名を直接みうけることができないが、先述のごとく、物部氏の本拠地の一つとされる。特に5世紀後半を中心とする木製刀剣装具の出土から、刀剣製作を中心とした鍛冶工房を基幹とした武器生産がなされていたと推察される。6世紀代の工房からは、鉄鉗が出土し、背後の石上・豊田古墳群、杣之内古墳群において鉄滓・鍛冶具が出土しており、その生産は継続的に行われていたとみなされよう。これら工房で製作された鉄器は、若干の共伴した遺物によって製品がどのようなものであったのか、推察せざるをえない。したがって、鉄器研究にみられる特定のものを選別することは、鉄器が打ち直してできることも手伝って、残念ながら特定することが難しい。

4 まとめ

畿内の鍛冶工房の解明にむけて、工房の実態を分析し、專業集落と鉄滓・鍛冶具出土古墳の分布・形成過程から“群”として捉え、工人集団の動向にアプローチしてみた。結局、鍛冶工房・手人集団について、生産工房における鉄器製作の工程・作られた製品の内容が明確にしがたいため、状況証拠の考定にとどまったことは否めない。しかしながら、断片的であるものの鍛冶工房の分布・様相を垣間みることができた。

倭政権にとって鉄器の確保は、重要な命題であった。4世紀後半以降の畿内大型前方後円墳を築造する政治力は、鉄素材の確保と鉄器生産工人の掌握によって達成されたといっても過言でなからう。ところが、4世紀末～5世紀前葉の鉄滓出土遺跡は、管見する限り小戸遺跡・纏向遺跡などがあり、不明な点が多い。I期の段階は、甲冑の技術革新等が説かれているが、生産地ではその詳細を知りえない。これに対して、5世紀前葉～6世紀初頭のII期の段階では、にわかに質・量共に鉄器生産の急増という事態が認められる。この時期を畿内の鉄器生産における一大画期⁽⁸⁰⁾と捉えることができる。II期における鍛冶工房の分布は、河内平野・石津川流域に展開していることから、大王家の平野部の治水事業に伴うものと理解される。ところが、III期の段階になると大県・大県南・布留・脇田（地光寺下層）遺跡の專業集落（特定工房）を残し、爆発的に操業を行った集落は、6世紀前葉までに終息⁽⁸¹⁾する。それは、5世紀末～6世紀初頭の手工業生産工房の再編中で、鉄器生産工房も王権の傘下により集中的に掌握されたであろうことが容易に推察される。このことは、專業集落の生産性向上のため、工人集団の再編⁽⁸²⁾がなされ集中化を促したと考えられる。IV期以降は、再び拠点的な集落内で操業が行われるようになり、寺院建立に伴って鍛冶工人が徴集され、金属器工人と共に造寺工房に組み込まれるものが認められる。これら布留遺跡、大県・大県南遺跡は、拠点專業集落で、物部氏の本拠地あるいは勢力範囲内に包括される。この二つは、古道「竜田道」に沿った位置にあたり、その掌握も同氏が携わっていたと

される。したがって、鍛冶工房の盛衰は、物部氏の動向⁽⁸³⁾と深く一致していると考えられる。隆盛を極めた物部氏も6世紀後葉に滅亡する。この時期以降、大王をはじめ蘇我氏を主導として推進された初期律令体制が形成される。その後、かつて河内勢力下の手工業部門の工人集団も直接に掌握⁽⁸⁴⁾されるようになったのであろう。飛鳥寺の建立にみられる、河内首に率いられた手人集団はその一端である。後の飛鳥池遺跡はこれら初期官営工房の様相を示すものである。忍海氏の工房は、5世紀後葉まで遡りうる可能性があり、大和における鍛冶工房として6～8世紀代に拠点的な位置を占めると考えられる。倭政権は、鉄器加工技術に支配を強め、初期官営工房設定⁽⁸⁵⁾という直接的な掌握方法によって、軍事生産に関連する手工業部門から行われたと推察される。畿内の「特定工房」は、倭政権の多様な政治的变化の中で盛衰が認められ、鉄生産地の直接把握によって変貌を遂げるのである。

註

- (1) 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」下『考古学研究』第21巻2号
小野山節 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』3
松井和幸 1968 「日本古代の鉄製鋏先・鋤先について」『考古学雑誌』第72巻3号 1987年
- (2) 野上丈助 「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻2号
- (3) 柳沢一男 1977 「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡」『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書41集
- (4) 河本 清 1986 「美作古代鉄生産をめぐる諸問題」『緑山遺跡』草加部工業団地第二期拡張工事に伴う製鉄遺構群発掘調査報告書 津山市教育委員会
光永真一 1987 「鉄生産」『吉備の考古学』山陽新聞社
- (5) 大澤正己 1987 「古代の鉄生産」日本古代の鉄生産1987年度たたら研究会大会資料 たたら研究会
- (6) 和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」『日本考古学』3 岩波書店
- (7) 森村健一 1974 「陵南遺跡現地説明会要旨」堺市教育委員会
- (8) 森村健一 1980 「土師27一街区一」『百舌鳥陵南廃寺報告』堺市文化財調査報告6集
- (9) 樋口吉文 1984 『東上野芝遺跡発掘調査報告』堺市文化財調査報告第10集
- (10) 石神 治 1985 「太平寺遺跡」『松原泉天津線関連遺跡発掘調査報告』大阪文化財センター
- (11) 中村 浩 1973 『陶邑・深田』大阪府文化財調査抄報第2輯
- (12) 北野俊明 1984 『四ツ池遺跡』堺市文化財調査報告書第6集 堺市教育委員会
- (13) 花田勝広 1984 『大県・大県南遺跡』柏原市教育委員会
- (14) 北野 重 1985 『大県・大県南遺跡』柏原市教育委員会
- (15) 北野 重 1983 『大県遺跡一堅下小学校校内運動場に伴う』柏原市教育委員会
- (16) 前掲(14)
- (17) 北野 重 1989 『平尾山古墳群一太平寺山手線建設に伴うその2』柏原市教育委員会
- (18) 西口陽一 1984 「神並遺跡」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会
- (19) 中西克宏 1979 『甦る河内の歴史』東大阪市文化財協会
- (20) 中西克宏氏ご教示。実見。
- (21) 中野 卓 1980 「第6調査区 西琳寺跡」『古市遺跡群Ⅱ』羽曳野市教育委員会
- (22) 大阪府教育委員会 1985 『友井東その1(近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書)』
- (23) 中西克宏氏ご教示。陶邑TK 23～47型式併行の包含層より出土。
- (24) 真鍋成史 1989 「森遺跡出土の鞆羽口・鉄滓の考察」『森遺跡発掘調査概要』交野市教育委員会
- (25) 近江俊秀 「郡川(63-193)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市教育委